例年なら二月三日が節分で、その翌日四日が立春というイメージですが、今年の節分は二月二日。したがってその翌日三日が立春でした。

ご存じの通り、もともと節分とは「季節の分かれ目」を意味するので、立春・立夏・立秋・立冬の前日を指し、合計四回ありました。

その中でも立春は、新年の始まりに相当する大きな節目なので、いつしか「節分」と言えば立春の前日のみを指すように変わってきたようです。

立春・立夏・立秋・立冬は固定日ではなくて、太陽の動きと地球の位置関係で決まるものなので、年ごとに変動します。これを決めるのは国立天文台。太陽の動きを観測、計算して決定します。今年の立春は、国立天文台が二月三日と決定したので、必然的にその前日の二月二日が節分となりました。来年の節分はまた、二月三日に戻るようです。

さて、江戸時代には「二日灸＝ふつかきゅう」という行事があり、毎年二月二日と八月二日に子どもたちにお灸を据えていたようです。この両日にお灸を据えると効果が著しいとされ、その年は無病でいられると信じられていました。そして、お灸の熱さや痛さに耐えたご褒美として、子どもたちに炒（い）った豆を与えていたようです。

「豆炒りを食ひ食ひあとの数を聞き」（いった豆を食べつつ、いくつお灸を据えられたのか聞いている）などという涙ぐましい川柳も残されています。幼児などが熱がって泣き叫ぶのを押さえつけて、お灸を据えるのが当時の親たちの愛情の発露であったようです。

「お灸を据える」とは、本来ヨモギの綿毛から作る「もぐさ」に火をつけて体のツボに置き、温める治療法のことを指します。若い世代の方は、「お灸」を見たことも聞いたこともないかもしれません。かく言う私も、本物のお灸を据えられたこともなく、実際お灸を据えられている人を、この目で見たこともありません。

江戸時代には懲罰として家庭や寺子屋でお灸を据えたこともあったようで、そこから転じて、現代では「お灸を据える」＝（説教する・厳しく懲らしめる・戒めのために痛い目にあわせる）という意味で使われています。

一昔前、親が言うことを聞かない子どもに対して、手をあげたり、力任せに何かをさせたりすることが多々ありました。今こんなことをすれば児童相談所に通報され、虐待の疑いをかけられかねません。無論、体罰は論外なのは言うまでもありませんが、こういった社会の風潮の中で、他人の目を気にするあまり、親御さんたちは「褒める」ことで子どもたちをコントロールしようとしてはいませんでしょうか。育児本にも「たくさん褒めて子どもの自己肯定感を高めましょう。」などと書いてあるので、その通りにしているのかもしれません。褒めて育てるのは悪いことではないと思います。ただ、どこまでやるかという程度の問題があります。親御さんが子どもを適度に褒めるのならよいのですが、褒めるというより、過剰におだてる、子どもの機嫌を心配し、親御さんが絶えず子どもの顔色をうかがうようになるともう危険信号。

褒めるに値しないことまで何でもかんでも褒めるような環境で育てると、子どもたちは学校でも教員にそれを求めるようになります。

「先生、日記を出しました。」「先生、体育着に着替えました。」「先生、手を洗って給食をちゃんと食べました。」などと言って褒めてもらおうとする。小学生ならできて当然のことでも、褒められ中毒になっているお子さんは、絶えず褒めてもらわなければ禁断症状が出るか、褒めてくれる人がいなくなると、何もしなくなるかです。

体罰にせよ褒めすぎにせよ、両極端に陥らぬように相当な注意を払いつつ、子どもたちに「適切なお灸」を据えられる大人でありたいものです。

「二日には　母も子のため　鬼になり」

（立教小学校校長　田代　正行）